



Title	始まり／終わりの物語 : グレアム・グリーン『情事の終わり』の構造
Author(s)	鴨川, 啓信
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1995, 29, p. 17-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47857
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

始まり／終わりの物語

— グレアム・グリーン『情事の終わり』の構造 —

鴨川啓信

1

『情事の終わり』(*The End of the Affair*, 1951)には、いわゆる補足的エピローグがない。グレアム・グリーン (Graham Greene) のそれ以前の小説、特に『権力と栄光』や『事件の核心』のような神と人の信仰をモチーフにした作品には、しばしば教義から逸脱しているような中心人物の死後「司祭が教会の規範を再設定する」¹⁾ エピローグが付けられている。その役割については様々な見方もあるが、多くの場合不自然で強引な決着をつけるというよりは、プロットに沿ったある結論を後押しするものである。一方『情事の終わり』では、聖人としてのサラ・マイルズの扱いは教会の教義から外れてはおらず、また彼女が「ステレオタイプの欲求不満の主婦から聖人へと変わっていき、移行の段階を進む」²⁾ 様子は物語の進展の中で明らかになる。事件後付け足し的にその結末が確認されるのではなく、彼女が聖人であるか否かの結論を出すこと自体が物語となっている。——カソリックの信仰を持たないサラが神を信じるようになり、聖なる愛を成就するに至る聖人の物語。この物語を構成しているのは、小説全体としては主にその心理的葛藤が描かれる第3巻の彼女の日記の引用と、彼女の起こした奇蹟等についての他の人物による証言である。そして『情事の終わり』は、サラや他の人物の物語であると同様ペンドリクスのもので

ある」。³⁾ 1人称の語り手モーリス・ベンドリクス物語とは、サラの物語を内包しているこの小説そのものであり、彼女の存在と彼女の物語を巡る語り手自身の物語である。このベンドリクス物語に着目していくと、如何に結論が出されていくかそして同時に如何に結論が出ないかが明らかになる。なぜならサラの物語の結論を出す語り手の物語の結論は、その中では確定されないのであるから。

2

ベンドリクス物語としての『情事の終わり』には、まさにサラとの情事の始まりと終わり、彼女の新しい愛人究明の顛末、そして彼女の死後残された人々の聖人の物語をめぐる対応が描かれる。語り手はそれら全てを経験した後の時点から回想的に語っていくが、決して事件の透明な記録者ではない。例えば愛人究明のプロットでの語りに見られるように、彼は自分の物語に後の時点よりコメントを加える。そのために読者には新しい愛人＝神の構図が物語中で明かされる以前に推測できる。サラが神を信じていないとする当時の認識では神は全くの非存在であり、そうであるからこそ私立探偵を雇ってその存在を探し出そうとするのである。従ってその関係をコメントしうる語り手は確かに認識の変化を経験している。ちょうどグリーンの前作『第三の男』において、ハリー・ライムが死んだと考える限り第三の男は見つからず、非存在の存在を認めることは新たな事実認識を伴うように。

しかしながらベンドリクスは変化は経験するものの、新たな決定的認識には達することはなく、自ら語る物語の中に「感情的に巻き込まれており、それ故に信頼できない語り手」⁴⁾として存在する。特に憎しみや愛については、ちょうど事件を経験している最中の登場人物のようにその認識・立場は頻繁に変化する。この小説は、“a record of hate far more than of

love”⁵⁾ であると激しい調子で語られ始めるが、しばらくすると、“When I began to write I said this was a story of hatred, but I am not convinced” (58) とその態度は不確かなものになる。その憎しみの対象もヘンリー、サラ、そして神と何度も移り変わり、また憎しみの感情自体も愛情との間を揺れ動く。どの時点の認識を最終的なものとするればよいのか。小説の最後においてすら、“I have no peace and I have no love, except for you, you. I said to her, I’m a man of hate. But I didn’t feel much hatred” (209) と結論的見解を示すそばから例外や否定を付け加え回避的な言及をする。そしてこの見解自体認識の混乱を経験した当時のベンドリクスのもなのか、それとも巻き込まれたままの語り手のものなのか判然としない。

確固たる認識に基づいて語られていない物語の中で、語っている時点での思考とそれより過去の時を生きた1人称の登場人物の思考とが、小説の後半しばしば融合しているように見える。以下はクロンプトン神父に自分の避けている認識を突きつけられたときの彼の描写である。

I lay down on my bed and closed my eyes and I tried to be reasonable. If I hate her so much as I sometimes do, how can I love her? Can one really hate and love? Or is it only myself that I really hate? I hate the books I write with their trivial unimportant skill, I hate the craftsman’s mind in me so greedy for copy that I set out to seduce a woman I didn’t love for the information she could give me. . . . (199)

現在時制で語られるこの憎しみと愛についての考察は、ベッドに横になった登場人物のものであると同時に、この問題に関して混乱したままの語り手のものでもある。特に自分の本や作法に関する記述は、作家であるベン

ドリクスの語りの姿勢そのものに言及しており、どちらの思考か区別することは不可能である。ベンドリクスは、物語の後半に経験する混乱を持ち越し、決定的な認識に至らぬまま過去の事件を語り始める。登場人物ベンドリクスの最後は、時間的にだけでなく状态的にも語り手ベンドリクスの始まりと繋がり、更に物語の後半上記のようにこの2者の思考が融合することで、彼の混乱した認識は小説の中を回り続けるのである。その結果最終的結論は常に回避されている。

語り手の回り続ける認識は、始まりと終わりが繋がった構造（始／終の構造）に反映され、それは小説中様々な箇所で見つけられる。サラとの情事の始まりが描かれるのは、情事が終わった後の状況が示されてからであり、また先取りのコメントはしばしば語り始めと同時にその出来事の結末を教える。このように語りは、小説の最後にベンドリクスとヘンリーがその冒頭で飲みに行った酒場へ再び飲みに行くように、元の位置（先に示された位置）に戻っていく。そして第3巻のほぼ全体を占めるサラの日記の引用も同様の構造となっている。R. H. Miller が指摘するように、「グリーンは明らかにサラが、彼女が常時そうあるべき鏡のような記録者であるより、自分自身の小説、会話等全てを書くことを望んでいる」⁶⁾。そういう意味で彼女の内面が描写されるこの日記自体は彼女の視点からの語りである。しかしベンドリクスが、“*I had no wish to read every entry*” (94) と言うように、それは引用する際選別・制限されており、また小説内の3つ目の巻を割り当てられ(更には幾つかのセクションに細分化され)て、その引用は彼の語りに組み込まれている。そこには、時間的には1944年の6月から彼がそれを読む直前までの記載が引かれているが、“*it was the last couple of pages I read first, and I read them again at the end to make sure*” (92) という彼の読み方の通り、第3巻では最初と最後は全く同じ日記の最後部からの引用となっている。最初が最後で

あり最後には最初の引用に戻っていく。

結論に達しないペンドリクス語りによるこの日記の引用では、最後部を最初に置く順序の入れ替えや同じ記述の繰り返しは、時間進行に従った心理変化を隠蔽し変化の示す方向性を曖昧にしている。「確かめるため」(“to make sure”)とは言うが、この構造で導かれる語り手の先入観に基づく読みのコンテキストは、サラの視点による語りが確定的にならないようにしている。事実日記は物語中2通りの異なった読まれ方をする。

まず第4巻の始まりに、“I want Maurice. I want ordinary corrupt human love” (133) という日記の記述が引用されるが、この第3巻の外に引かれた箇所は、その場での登場人物ペンドリクスの日記の読み方を代表している。彼にとって日記の記事は、サラは決して彼を捨てたわけではなく彼への愛はまだ終わっていないことを知らせる福音である。日記引用直前の第2巻の終わりでの、“It’s a strange thing to discover and to believe that you are loved” (92) という先取りのコメントとこの記述との内容的一致から、第3巻の始／終の構造に納められた日記は心理的变化をではなく変わらぬ愛を見せる。最初に示され、最後に確認され、彼女が彼を愛している事実が引用中を回り続けている。そうであるならば日記はペンドリクスの不確かな愛憎の認識に決定的な情報を与え、結論に導いていくはずである。だがこの読み方は、彼女の日記が提供するコンテキストを歪めた(最初と最後を繋げた)ものから出されており、当然ながら情事を再開し、2人が強くお互いを愛しているという最終結論を目指すペンドリクスの働きかけは、彼女の死によりその実現は回避される。

第5巻にも日記の記事が引用されているが、その1つは短いものではあるが、始終の繋がった形で引かれている。

‘O God, if I could really hate you, what would that mean?’

And I thought, hating Sarah is only loving Sarah and hating myself is only loving myself. I'm not worth hating. . . . Nothing — not even Sarah — is worth our hatred if You exist, except You. And, I thought, sometimes I've hated Maurice, but would I have hated him if I hadn't loved him too? O God, if I could really hate you. . . . (200)

後半の“And, I thought”から始まる部分は、第3巻にある1945年10月2日付のサラの日記からの引用で、最後の“O God,”以下はここでの引用部の最初に繋がる。だが後の方のこの引用には引用符が付されておらず、サラの愛憎決定不可能な思考が、ベンドリクスのもものと重なり合っているように見える。この場面は彼の混乱の1つのクライマックスであり、先に示した語り手と登場人物の融合に続く場面である。すなわち回り続けるベンドリクスの愛憎不可分な混乱は、神を憎むと同時に愛するというサラの同様に不可分な思考と同調している。始／終の構造での引用符の欠落は、2人の思考の境を不確かにしてしている。愛と憎しみについて結論を下すどころか、日記は決定不可能な状態をもたらしている。第5巻で日記の記事はベンドリクスの混乱の一翼を担っている。それは彼が彼女の日記を神への憎しみと愛についての心理的葛藤の記録として読む結果である。

これら2通りの日記の読まれ方が示すように、始／終の構造で一度不明瞭にされた聖人の物語の一部としての日記の役割が、4巻から5巻に進むことで明らかにされる。ベンドリクスの物語において、第5巻は大きな転換点となっている。ただし彼にとっては、日記のどちらの読みも結局は愛憎の決定不能性を確かめることとなる。

3

サラが初めて小説中に姿を現す際、「風邪をひいて死んでしまう」というその最期も同時に紹介される。そして第4巻の終わりで実際に彼女が死んだことが語られるとき、彼女の存在は最初に示された「終わり」にたどり着く。第4巻での日記の読まれ方も含め、1から4巻の間で始まりと終わりを繋げたこの構造で語られるのは、ベンドリクス当初の認識で捉えられたサラの存在である。そして第5巻はその構造の外にありながら、サラを巡る語り手の物語としてはその後が続いている。日記の引用である第3巻を除いて、小説は1人称の限定された視点から語られるが第5巻に至り、遅れてきたサラの手紙、彼女の母親やクロプトン神父の話、パーキスとスマイスによるサラの起こした「奇蹟」についての証言等1人称の人物に見えていなかった情報が多くもたらされる。転換点となる第5巻で1人称の外の視点からの語りは、聖人としてのサラの姿を浮かび上がらせる。

パーキスの息子に起こった奇蹟は、手紙によって知らされる。それを読むベンドリクスの描写は、“‘Dear Mr Bendrix,’ I read, and thinking it was a note of thanks my eyes impatiently took in the last sentences.” (194) となっている。彼が手紙を最初から読み始めるのは最後の文を読んだ後であり、小説中に引用される手紙もサラの日記の場合と同様、最後の記述が最初に来ており最後にはその記述へと続いて(戻って)いく。私立探偵パーキスの語り方は彼のその手紙の中に述べられている。すなわちそれが、“in my profession we are trained to put things in order and explain first things first” (194) というものであれば、この始／終の構造はベンドリクスによるものである。そしてその手紙がただの礼状であるという判断で最初と最後が結びつけられ、奇蹟についての言説は覆い隠される。加えてこの手紙の本文自体は、脱線的な背景説明、余

分な心理描写を含んでおり、かつてベンドリクスがパーキスの報告書を評したように、「冗漫で、要点を避ける (evasive)」のようなものだ。ただしこの手紙には裏側に追記があり、それは始／終の構造の外に存在している。それが単なる礼状ではなく、奇蹟の報告であることを決定的にするのは、この追記によってサラを通して魔法的力がもたらされた状況が明確に示されるときだ。

第5巻でベンドリクスは、サラの日記を葛藤の描写として読む。これは、パーキスの手紙の追記のように、始終の繋がった日記の引用の外に存在によってその読み方を規定されるからだ。特にサラの死後遅れて届けられる彼女の手紙は、始／終の構造で曖昧にされた部分をはっきりと提示する。配達が遅れたことで1から4巻を回り続けるサラの存在の外に出ており、また内容的にも彼女自身によるカソリックの信仰についての告白は、同じサラの視点による日記にも書かれていなかった外側の情報である。ベンドリクスの始／終の構造が特定の読みに対して回避的である一方、その外からの語りは決定的に働く。

奇蹟に関するもう1つの証言は無神論者スマイスによるものだが、彼はそのことを電話でベンドリクスに話そうとする際、“There’s no getting round it.” (207)と、彼の回避的な態度を批判する。奇蹟という言葉が、ベンドリクスの語りの地の文では「偶然の一致」(“coincidence”)と置き換えられるように、その概念が彼の語りに入り込むことは避けられる傾向にある。従ってスマイスの電話は、決定的な言葉が発せられる前に切られる。始まりと終わりの繋がった文字通り round な構造は、ベンドリクスの語りでは決定回避的であり、回り続ける構造は1つの最終決定を下す要素をその内に持たない。ここで回避されるものは、サラの奇蹟の証言であり、ひいては聖人としての彼女の物語である。語り手・登場人物共に意識的にこれらの存在を避けている。しかしパーキスの手紙は、回避的な本文

の「外」の追記によって奇蹟の証言としての意味が規定され、小説内にその概念を持ち込む。またスマイスに語らせなかった事象をベンドリクスは自ら補い、新聞の見出しとして引用符で区切られた、いわば彼自身の言葉の外側という体裁ではあるが、「奇蹟」を自分の小説の中に持ち込んでいる。

この第5巻で経験する認識の混乱を引きずったままの語り手には、その混乱の源ともいえるこれら外からの証言に対して非常に無力であるような印象を受ける。語り手はサラの手紙を小説中に引き終わった後、“If I were writing a novel I would end it here” (160) と、この後続いていく『情事の終わり』は、彼の語る小説ではないと言わんばかりである。また手紙に先立ってスマイスから、彼女がカソリックになろうとしていたという秘密が知らされるが、その際ベンドリクスが “How much more was there to discover? The thought was like despair” (154) と嘆くように、彼の外の視点からの語りは彼の語るサラ像の外側に勝手に聖人の物語を構築していくかのようである。第5巻ではもう1つ生前のサラ本人すら知らなかった事実、彼女は実は2歳の時に洗礼を受けており、もともとカソリックであったということが彼女の母親によって語られる。ここに2つの奇蹟がそろえば、サラは列聖される状態となる。始／終の構造による決定回避的なベンドリクスの語り、その外にあるものによって規定される時、小説は彼が統括しうる範囲を越えてしまうのか。

いみじくも小説の創作と聖人について、ベンドリクスは次のように考える。

The saints, one would suppose, in a sense create themselves. They come alive. They are capable of the surprising act or word. They stand outside the plot, unconditioned by it. (203)

聖人のサラは、語り手の外からの証言で自らを作り上げた、彼の物語の外側の存在のように見える。だが彼女の驚くべき言動が明かされ、聖人サラがプロットの外、彼の語り手の外にいるように見えてくるならば、それはちょうど彼のこの聖人観に合致した物語展開である。ベンドリクスの支配を越えたような語りは、彼が感情的には聖人の物語を認めたくないことを明らかにする一方、語り手が依然として語り続けることでサラが聖人であることを確認していく。第5巻にもう1箇所ベンドリクスがサラの日記を読む場面があるが、それは外からの語りも全て出そろった小説の最後部である。ベンドリクスの平安を祈っているその記事に応じる彼の言葉、“One of your prayers at least had not been answered.” (209) は、逆説的に彼女の祈りの力を認めていることを示している。

ベンドリクスは奇蹟を奇蹟と認めるから「偶然の一致」と言い換え、そしてサラが聖人であると認識するから「私が存在を信じないサラ」と呼びかけるのである。彼は聖人の物語を回避すると同時に支持している。彼の認識の混乱とは最終決定されていない状態であり、奇蹟や聖人の物語が回避される姿勢も決定的なものではない。ベンドリクスがサラの死を先行して語る時、

‘You’re wet through, Sarah. One day you’ll catch your death of cold.’

A *cliché* with its popular wisdom can sometimes fall through a conversation like a note of doom, yet even if we had known he spoke the truth. . . . (15)

というように、語り手自身の言葉でなく、「風邪をひいて死んでしまう」という決まり文句とそのヘンリーの言葉が真実であるというコメントの組み合わせでそのことを示す。そして彼女の死が語られる場面でも、その事実

は再びヘンリーの言葉によって知らされる。ベンドリクスは奇蹟と同様彼女の死を自分の言葉で語ることを避けている。1から4巻の始／終の構造でのサラの存在についての語りに、彼女の死（終わり）の決定的な認識が欠けている。それは彼女の死後、葬式に遅れたベンドリクスの“I hadn't after all seen the last of Sarah” (171) という言葉で確認される。更には “It was as if she were alive still, in the company of a lover she had preferred to me” (148) と考えるに至る神に対する嫉妬心により、死後の生の概念と神に愛される聖人の物語を読み出すコンテキストを語り手自身が提供する。始まりと終わりの繋がりの中で不確実になるものは、その外の存在によって意味・役割が特定される。そしてこの始／終の構造がベンドリクスの語りであるのと同様、その外の存在も一貫した姿勢を持たない混乱を反映した彼の語りである。彼は小説の作法について以下のように述べている。

So much of a novelist's writing, as I have said, takes place in the unconscious: in those depths the last word is written before the first word appears on paper. We remember the details of our story, we do not invent them. (33)

小説中にあるものは、最初の1語から最後の1語まで、語り手の内にあり語られるものである。1人称の外の視点も、プロットの外の聖人もベンドリクスの語りの中にある。彼は聖人サラの物語を回避すると同時に支えているわけであるが、この矛盾した状況も最初からベンドリクスの語りの中にあるのだ。

4

『情事の終わり』の中に見られる始まりと終わりの繋がった構造は、そ

のほとんどが小説が進んでいく過程で意味や読み方が決定されていく。決定回避的な語りは、サラの日記やパーキスの手紙、そして彼女の存在そのものを一時不確かにするが、後に「外」からの証言を導入することでそれぞれの読み収まっていく。だが小説全体を1つの始／終の構造としている語り手の認識の決定不能の物語にはどういう結論が与えられるのであろうか。

小説中のサラやヘンリーに対する表裏一体の愛憎は、ページが進むにつれ憎しみよりも愛に落ち着く様相を呈している。神に関しても小説の最後に以下のようにある。

I said to Sarah, all right, have it *your* way. I believe you live and that He exists, but it will take more than your prayers to turn this hatred of Him into love. (210)

この絶望的な譲歩ともいえる宣言でベンドリクスは、結局は神の存在を認め聖人としてのサラを認めている。神への憎しみは変わらないとはいえ、先に見たように、最後には神を憎むと同時に愛するようになったサラの愛憎共存の思考に同調したことは、彼にも同じことが起こりうることを暗示しているとも読める。「激しく憎むことが可能であるので、ベンドリクスは同様に激しく愛することも可能である。読者には彼が〔愛を〕学ぶには年をとりすぎているとは信じられない」⁷⁾ という見解は、この延長線上に想定されるもので、他のグリーン作品からの連想によっても十分に妥当な読みといえる。ただしこれはあくまでも可能性だ。他方では「ベンドリクスにとって、彼自身が不承不承神を認めていることを最終的に知らせる感情は、当然愛や平安を求める気持ちではなく、それらの歪んだ鏡像である憎しみと嫉妬だ」⁸⁾ とする意見もある。この決着をつける術はない。

むしろベンドリクスの語りは両方の意見を支持し、最終的決定を回避し

ている。そういう意味で小説の最後に彼が“leave me alone for ever”と神に祈るとき、この祈りこそが『情事の終わり』の語り手の状況を言い表している。「放っておいてくれ」とは、決定放棄の祈りである。つまり神により祈りが実現されようとされまいと神との関係の最終的な結論を避けている。小説は決定を放棄したこの場で終わっており、その後の展開は様々に想像できると同時に何にも決定できない、決定不能という状態以外は。決定放棄の祈りに規定されるという矛盾した状態で、語り手は最初から語り始める。“Sometimes I don't recognize my own thoughts. What do I know of phrases like 'the dark night' or of prayer, who have only one prayer?” (47) というように、認識できない状態を作り出す唯一の祈りを持って語り続けていく。ペンドリクスが始／終の構造で永遠に繰り返されて続いていくため、その中で確定されるはずの聖人の物語も、語り手の態度の通り回避と決定を繰り返していく。グリーンンの他の作品との関連で論じられる際には、ペンドリクスのその後の可能性を特定することはできるが、それは始／終の構造をした小説の外の要素によって判断されるからである。物語の外にエピソードのないこの小説では、ただこの決定回避の祈りだけが回り続けていく。

注

- 1) A. A. DeVitis, *Graham Greene, Revised Edition* (Boston: Twayne Publishers, 1986), 106.
- 2) R. H. Miller, *Understanding Graham Greene* (U. of South Carolina P., 1990), 86-87.
- 3) Brian Thomas, *An Underground Fate: the Idiom of Romance in the Later Novels of Graham Greene* (U. of Georgia P., 1988), 12.
- 4) DeVitis 95.
- 5) Graham Greene, *The End of the Affair* (London: William Heinemann & The Bodley Head, 1951), 1. これ以降の『情事の終わり』からの引用は全てこの版による。

- 6) Miller 84.
- 7) DeVitis 105.
- 8) Thomas 18.

(大学院後期課程学生)